

複合動詞「V-切る」における意味合成

日 高 俊 夫

1 はじめに

「叩き切る」「読み切る」「冷え切る」のような複合動詞「V-切る¹」は、その意味の多義性のせいもあり、これまでに度々分析の対象とされてきた（森田（1989）、姫野（1999）、杉村（2008）、志賀（2014）等）。また、統語構造の面から見ても、「V-切る」は「語彙的複合動詞」「統語的複合動詞」（益岡・田窪（1992）、影山（1993）等）の両方にまたがると考えられ、新沼（2009）²のような、語彙と統語構造の関係の面からの論考もある。

しかしながら、これまでの論考では、「V-切る」全体を観察しながら、その意味によって「V-切る」を分類するということとはなされてきているものの、それぞれの場合の「切る」が具体的にどのような意味および機能を持っているか、また、それが前項動詞（以下「V1」）の意味とどのように合成されて複合動詞を形成するのかについての形式的な記述・分析はあまりなされていないように思われる。

本論では、「切る」そのものが持つ意味機能と、V1の表す意味との単一化のプロセスを形式的に記述・分析することによって、従来の直観的な多くの分類をより単純化することができ、「V-切る」全体の意味を構成的に導出するこ

¹ 「切断」意味を表す場合は「切る」、それ以外の場合は「きる」と分けて表記する方法もあるが、その区別が明確でない例もあり得るので、本論では一貫して「切る」の表記を用いる。

² 新沼（2009）では、すべての「V-切る」を統語的に分析している。本稿は一応影山の立場を採り、「V-切る」を統語的複合動詞と語彙的複合動詞に分けて考えるが、それは便宜上のことであり、どちらか一方の立場をことさらに擁護するものではない。

とができることを示す。

2 先行研究

「V-切る」の表す意味に基づく分類として、森田 (1989)、姫野 (1999)、杉村 (2008)、志賀 (2014) を概観する。まず、森田 (1989) は、「V-切る」の意味を次の4つに分類している。

- (1) a. **先行動詞が、物を切る方法を表す動作動詞の場合 (切り離す行為そのものを表す)。**

搔っ切る、噛み切る、食い切る、叩き切る、断ち切る、突き切る、ねじ切る、挽き切る、焼き切る

- b. **「切る」が完了を表す場合。**

打ち切る、思い切る、数え切る、やり切る、読み切る、閉め切る、売り切る、買い切る、貸し切る

- c. **それ以上付け加える必要はない、これで完全だ、その行為を自信を持って行うのだという、強い言い方。**

言い切る、思い切る、踏み切る

- d. **終了意識が、それ以上は進まないという限界意識、完全に行き着く限度まで達したという強調意識となり、「非常に」「完全に」の意を添えることにもなる。**

押し切る、困り切る、澄み切る、張り切る、冷え切る、(……の噂で) 持ち切っている、煮え切 (らない態度)、苦り切る、弱り切る、分かり切る、割り切る

森田の分類の問題点として、杉村 (2008) が指摘し、新沼 (2009) も言及している通り、(1b,c) の区別が明確ではないことが挙げられる。例えば、「やり切る」は (1b) の「完了」、「言い切る」は (1c) の「強い言い方」に分類

されているが、何をもってその分類がなされているのか、基準が明らかでない。また、(1c,d)の違いも判然としない部分がある。(1c)の「自信を持って行う」ことができる主体は、人間などのいわゆる有情物であるから、自然と動詞も意図性の意味を備えるものになるのに対して、(1d)の「限界意識・強調意識」に分類される例は、前項動詞（以下「V1」）が非対格動詞であることが多いことから、「V-切る」全体の意味にV1の意味的性質が大きく影響していると考えられる。この分類は「V-切る」全体の意味分類としては妥当性があるかもしれないが、本稿の目的であるV1と「切る」の構成性の面から考えてみると、再考の余地があると思われる。

杉村（2008）は語彙的複合動詞に分類されるものをさらに2つに分け、「切る」が補助動詞的な機能を持つものを3つに分類している。

(2) 本動詞「切る」の持つ切断の意味が生きているもの

- a. 「**切断**」：前項動詞で表される手段によって対象を物理的に分断することを表す。

(例) 噛み切る、食い切る、叩き切る、首を締め切る、枝を打ち切る、鼻緒を踏み切る、稲穂を押し切る、退路を断ち切る

- b. 「**終結**」：前項動詞で表される行為によって事態の継続に区切りをつけることを表す。

(例) 番組を打ち切る、申し込みを締め切る、追跡を振り切る、彼の才能を見切る、思いを断ち切る、思い切る、割り切る

(3) 切断の意味があまり感じられず、接辞化したもの

- a. 「**行為の完遂**」：動作動詞に付いて、当該の事態を最後までやり残しなく完全に行うことを表す。

(例) 走り切る、食べ切る、使い切る、意見を押し切る、難局を乗り切る、耐え切る、待ち切れない、守り切る、隠し切る

- b. 「**変化の達成**」：変化動詞に付いて、当該の変化が最後まで滞りなく生じ

ることを表す。

(例) 諦め切る、治り切る、信じ切る、死に切れない、日が暮れ切る、氷が溶け切る、煮え切らない態度

- c. 「**極限状態**」：状態動詞に付いて、すでに成立している状態が質的にさらに深まってそれ以上は進まない限界に達していることを表す。

(例) 疲れ切る、冷え切る、困り切る、濁り切る、澄み切る、広がり切る、太り切る、頼り切る、仕事に張り切る、下がり切る

この分析では、共起する V1 の種類はある程度明確になっている。また、次のように、「対象物（目的語）の 100% 消費」や「イベントの進展可能性のなさが 100%」を表すという、動詞句全体のイベントを考察しながら分析している点は興味深い。

- (4) 接辞的な「-切る」は、「行為の完遂」の場合は対象物が 100 パーセント消費されることを含意し、「変化の達成」の場合は当該事態の裏の事態が 100 パーセント消滅することを含意し、「極限状態」の場合は当該事態がそれ以上進展する余地が 100 パーセントないことを含意する。これらはいずれも残余がゼロになるように切り捨てていくという意味を持つ点で共通し、「切断」や「終結」の「-切る」とつながっている。(杉村 2008:72)

志賀 (2014) は、基本的に上記 2 つの分析と似ているが、李 (1997) の「語彙化」同様、V1 と「切る」が分離できるか否かに注目し、分離できないものを「一語化」として別に設けている。

- (5) a. 切断：物を切る (ex. 彼は肉を噛み切った。)

- b. 終結：事態の継続の切断 (ex. 彼は彼女への思いをきっぱりと思い切った。)

- c. 完遂：行為が最後まで行われた（ex. 彼は嫌いな肉を食べ切った。）
- d. 極限：状態や行為が極限まで達し、それ以上は進まない（ex. 私は仕事をたくさんして、疲れ切った。）
- e. 一語化：新たな意味になっているもの（ex. 彼は張り切って仕事をしている。）

(6) 語彙化：突っ切る、振り切る、割り切る、打ち切る、押し切る、煮え切る、張り切る、乗り切る、踏み切る、思い切る（李 1997）

本論の目的は、V1 と「切る」の意味合成を構成的に記述・分析することであるから、構成性の原理を満たさない例については「1 語」として扱うのが妥当であると考え、基本的に、志賀（2014）や李（1997）の立場を踏襲する。

姫野（1999）は、本動詞「切る」の意味で用いられる語彙的複合動詞と接辞的複合動詞に分類し、さらに後者を「行為の完遂」と「極限の状態に達する」に下位分類し、前者が継続動詞に、後者が瞬間動詞につくとしている。しかしすべての継続動詞や瞬間動詞が「切る」と合成されうる訳ではない。

- (7) a. 継続動詞 + 切る：*笑い切る、*泣き切る、*猫を撫で切る、*ボールを蹴り切る、*壁を押し切る、*相手を殴り切る
- b. 瞬間動詞 + 切る：*見つかり切る、*着き切る、（スイッチに）*触れ切る、*知り切る

以上、主な先行研究を概観した。特に杉村（2008）のイベント進行に関する考え方や志賀（2014）および李（1997）の「語彙化」の扱いは注目に値する。以下では、これらの洞察を生かしつつ、より透明性の高い形で意味合成のプロセスを形式化していく。

3 意味表示のシステム

具体的な分析に入る前に、本論で用いる動詞の意味表示に関して簡単に説明する。本論では、動詞の意味表示装置として、Pustejovsky (1995) の特質構造を含む意味表示を修正した、Hidaka (2012) および Arai and Hidaka (2013) の表示を用いる³。

- (8) $\left[\begin{array}{l} \text{ARGUMENT STRUCTURE} \\ \text{[統語構造における項]} \\ \text{QUALIA STRUCTURE} \\ \left[\begin{array}{l} \text{Truth-conditional Section} \\ \text{FORMAL: 時間的特性、視点に関する情報} \\ \text{CONST: 語彙概念構造 (LCS)} \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{l} \text{Non-truth-conditional Section} \\ \text{TELIC: その動詞が持ち得る結果状態} \\ \text{TRIGGER: その動詞が成立するための外的要因} \end{array} \right] \end{array} \right]$

形式役割 (FORMAL) 中の「時間的特性」については、(9)に示された Igarashi and Gunji (1998) および郡司 (2004) の記述方法を援用する⁴。

- (9) s : 行為開始時点 f : 行為完了時点兼状態開始時点 r : 状態終了時点
- a. 着る : $s < f < r < \infty$
 $(s < f$: *activity* $f < r$: 行為完了時点で状態変化 $r < \infty$: 行為前状態への復帰)
- b. 腐る : $s = f < r = \infty$
 $(s = f$: *achievement* $f = r$: 行為開始時点で状態変化 $r = \infty$: 行為前状態への復帰なし)
- c. 歩く : $s < f = r < \infty$

($f = r$: 状態変化なし, 行為完了時点がそのまま状態終了時点)

s, f, r は、それぞれ、「行為開始時点」「行為完了時点兼状態開始時点」「状態終了時点」を表す。 s, f 間の「 $<$ 」は、開始から完了まで時間幅が存在することを表し、「 $s = f$ 」は、行為開始時点と状態開始時点が同時であることを表す。 f, r 間の「 $<$ 」は、行為完了時点で状態変化があることを示し、 $f = r$ は状態変化がないことを表す。また、 r, ∞ 間の「 $<$ 」は行為前状態への復帰があることを、「 $r = \infty$ 」は復帰がない（不可逆的な変化）ことを示す（ただし、この「復帰」については本論と内容と直接関係を持たないので、以降では省略して記述することもある）。

ところで、(9b)の「 $s = f < r$ 」は、行為開始時点と状態開始時点が同じなので、瞬間動詞に分類されるが、瞬間動詞の中でも「腐る」は「死ぬ」等と異なり、状態変化が一度きりでなく再帰的に起こる。つまり、「死ぬ」の場合は、一度死んだ状態になればそれでイベントが完了するのに対して、ものが「腐る」場合、腐り始めの時点で「腐った」と言えるが、その後もその変化は再帰的に継続する。その違いを記述するために、(9)を若干改訂して次のような表記を用いる。

- (10) a. 死ぬ : $s = f < r = \infty$
 b. 着く : $s = f < r < \infty$
 c. 腐る : $s = (f < r)^n = \infty$
 d. 冷える : $s = (f < r)^\infty < \infty$

³ 本論とは直接関係を持たないが、TELIC（目的役割）の値としては「-」「 ϕ 」「+」の3つを想定している。「-」は、結果状態を持ち得ない純粋な活動動詞（ex. 叩く）や状態動詞（ex. そびえる）の値である。「 ϕ 」は、例えば「壊れる」のように既に命題レベルで結果状態（壊れた状態）が指定されているため、それ以上の指定がなされないことを表す。

「+」は、「煮る」のように、命題レベルでは process を表す（「15分煮る」）が、「15分で煮る」のように、若干容認性は落ちるが結果状態を表し得る動詞が持つ値である。

⁴ 「視点に関する情報」は本論とは直接関係がないので説明を省略する。詳細については、Arai and Hidaka (2013) を参照されたい。

(10c) の「 $(f < r)^n$ 」は状態変化が再帰的に何度も起こり、 n の時点でそれ以上「腐る」変化をしないことを示している⁵。変化する主体がいわゆる漸次的対象 (incremental theme) である場合、 n は、腐る変化がそのすべてに及んだ時点であるとも言える (ex. 一丁の豆腐が腐った)。また、単なる「歩く」の場合は継続動詞で状態変化はないが、「20km 歩く」という場合、20km 歩いた時点で行為は終了し、歩いている状態から、止まった状態等に変化する。そのため、本論では、「20km 歩く」の時間的特性の表記は次のようになると考える。

(11) a. 歩く : $s < f = r < \infty$

b. 20km 歩く : $s < f < r < \infty$

以上、本論で用いる意味表示を概観した。以下では、この意味表示を用いて、「切る」と V1 の組み合わせについて分析していく。

4 語彙的複合動詞の「V-切る」

本論では、語彙的複合動詞の「V-切る」の語形成過程を、Hidaka (2012) の「LCS 融合」のメカニズムに基づいて説明する。「LCS 融合 (LCS Blending)」とは、V1 と V2 の LCS (特質構造内の構成役割 (CONST) の値) を、共通する意味述語を基盤に対等な立場で融合させ、1つの LCS を作るという操作である。LCS 融合にはいくつかのパターンがあるが、「切る」は、いわゆる状態変化使役他動詞であるので、切断の意味を表す語彙的複合動詞「V-切る」の形成に関わる融合のパターンは、以下の2つであると考えられる⁶。

(12) 同じタイプの LCS 融合の例

CAUSE ([ACT ON (x, y)], [BECOME (y, \dots)]) +

CAUSE ([ACT ON (x , y)], [BECOME (y , ...)])

→ CAUSE ([ACT ON (x , y)], [BECOME (y , ...)])

例：折り曲がる、覆い隠す、破り捨てる、ちぎり取る

(13) 異なるタイプの LCS 融合の例

ACT (ON) (x , y) + CAUSE ([ACT ON (x , y)], [BECOME (y , ...)])

→ CAUSE ([ACT ON (x , y)], [BECOME (y , ...)])

叩き壊す、押し開ける、引き倒す、蹴り開ける

このメカニズムを「V-切る」に適用すると、次のような例が得られる。

- (14) a. (12)によるもの：焼き切る、ねじり切る、挟み切る、(トイレットペーパーを) 破り切る、(退路を) 断ち切る、締め切る

ex. 焼き切る：

CAUSE ([ACT ON (x , y)], [BECOME (y , BURNT)]) +

CAUSE ([ACT ON (x , y)], [BECOME (y , CUT⁷)])

→ CAUSE ([ACT ON (x , y)], [BECOME (y , BURNT \wedge CUT)])

- b. (13) によるもの：噛み切る、食い切る、叩き切る、(生地を) 押し切る、(枝を) 打ち切る、(鼻緒を) 踏み切る、(鉄板を) 搔き切る、(糸を) 引き切る、(説得を) 振り切る

⁵ もちろん、腐った後に風化したり乾いたりする変化はあり得る。

⁶ 他のパターンについては Hidaka (2012) を参照されたい。

⁷ CUT は、切った後の対象が分離した状態等を表す。英語の動詞の cut と異なり、日本語の「切る」は必ずしもナイフやハサミ等の道具を必要としないので、「切った」結果の状態がどのようなものであるかは詳細に記述する必要もあるが、本論との直接の関係はないので、ここでは単に CUT と表記しておく。

ex. 叩き切る⁸ :

ACT (ON) (x, y) + CAUSE ([ACT ON (x, y)], [BECOME (y, CUT)])
 \rightarrow CAUSE ([ACT ON (x, y)], [BECOME (y, CUT)])

また、この「LCS 融合」には「イベント開始時点の意味述語が共有されなければ融合されない」という原則がある。例えば、「*叩き潰れる」が容認されないのは、「叩く」のイベント開始時点の意味述語が ACT であるのに対して、潰れるのそれは BECOME であるからである⁹。この原則により、次のような例が原理的に排除できる。

- (15) *ねじれ切る、(窓に指を)*挟まり切る、(包丁が足の指を)*落ち切る、(裁断機の刃が紙の束を)*降り切る

包丁が落ちて足の指を切るということは、現実世界ではあり得ることであるが、それを複合動詞として「*落ち切る」とは言えない。このように、「LCS 融合」という操作を想定することで、他の複合動詞の場合と同様、語彙的な「V-切る」についての V1 の選択制限を予測することができる。

5 統語的複合動詞の「V-切る」

5.1 「切る」の意味的選択制限

具体的な形式化を行う前に、まず、統語的複合動詞の「V-切る」について、V1 に対する意味的選択制限を観察する¹⁰。

- (16) a. 状態動詞 (述語) : *神戸に住み切る、*山がそびえ切る
 b. 状態変化動詞 (述語) : *驚き切る、*知り切る (cf. 知り抜く)、*死に切る¹¹、*着き切る¹²、*その試験に落ち切る、大人になり切る、疲れ切る、

分かり切る、（氷が）溶け切る

- c. **ゴールのない活動動詞（述語）**：（太鼓を）*叩き切る、*おしゃべりし切る、
*笑い切る、*泣き切る、*叫び切る、*猫を撫で切る、*相手を殴り切る、
*壁を押し切る、*父の肩を叩き切る、*馬が丸太を引き切る、?*恋人を
愛し切る
- d. **ゴールのある活動動詞（述語）**：野菜を炒め切る、その本を読み切る、カー
テンを引き切る、ドアを?（最後まで）押し切る、?芋を煮切る、ジョッ
キのビールを飲み切る、テーブルの料理を食べ切る、10km を走り切る
- e. **使役変化他動詞（述語）**：部屋の蚊を殺し切る（cf. ?一匹の蚊を殺し切
る）、その車を（やっと）壊し切る、夕食を作り切る、ケーキを焼き切る、
家を建て切る、お詫びの手紙を書き切る、模型飛行機を組み立て切る

(16) の結果から、次の一般化が得られる。

⁸ (14b) の V1 は同じ ACT ON(x, y) の形で表す（個々の動詞の違いは ACT ON の状態に帰せられるが、ここでは省略してある）ので、(14b) の語形成はすべて「叩き切る」と同じ形で表すことになる。

⁹ これにより、影山 (1993) の「多動性調和の原則」と似た結果が得られる。具体的な違いに関しては Hidaka (2012) を参照されたい。

¹⁰ (16) では、「(述語)」という表記になっているが、これは、統語的な「V-切る」が、その補部として VP を取ることを想定しているためである。

¹¹ 「死んでも死にきれない」という表現があるが、これは「あまりに残念で、このままでは死ぬことができない」という「可能」の意味を表すので、本稿で問題にしている「完了」の意味ではない。したがって、本稿の考察の対象からは除外するが、青木 (2004) が論じているように、九州方言では、生産的に「切る」が可能の意味で使われる。そのこととの関連性の議論は別稿に譲りたい。

¹² 「?全員の学生が着き切った」のように、主語が漸次的対象であれば容認性が上がるように思われるが、その場合、「到着」というイベントが複数回起こり、その結果想定されている学生が全員到着した時点を指す。つまり、イベントそのものが漸次的対象になっている訳であるが、これについては、「V-ていく」を分析した日高・新井 (2012) の説明を本論のメカニズムに組み込むことができると思われるが、詳細な分析は今後の課題としたい。

- (17) a. 状態動詞、純粋な活動動詞は複合できない。
 b. 状態変化動詞の中には複合できないものも存在する。
 c. 活動動詞であっても、目的語に、漸次的対象 (incremental theme) を取る場合は複合可能。
 d. 意図性は問題ではない。

大まかに言うと、動詞を含む全体的なイベント (動詞句) に何らかのゴールが感じられ、かつ、ゴールに至るまでに何らかのプロセスが存在しなければならないということになる。

5.2 「切る」の形式化

上述の選択制限の形式化を含む、統語的複合動詞を作る「切る」の意味表示を次のように想定する。

- (18)
$$\left[\begin{array}{l} -kir \\ ARGUMENT STRUCTURE \\ \boxed{1} [VP: [FORMAL: s_1 < f_1 < r_1 \vee s_2 = (f_2 < r_2)^n \vee s_3 = (f_3 < r_3)^\infty]] \\ QUALIA STRUCTURE \\ \left[\begin{array}{l} Truth\text{-}conditional\ Section \\ FORMAL: kir(\boxed{1}) = p, \\ \text{where } p = r_1 \vee r_2^n \vee r_3^{\infty \rightarrow n}, p \in \boxed{1} \\ CONST: \phi \end{array} \right] \end{array} \right]$$

まず、項構造についてであるが、ここで扱う「V-切る」は統語的複合動詞なので、「切る」はVPを補部として選択すると仮定しておく¹³。そのVPのイベントタイプとしては $s_1 < f_1 < r_1$ 、 $s_2 = (f_2 < r_2)^n$ 、 $s_3 = (f_3 < r_3)^\infty$ の3タイプが可能であることが指定されている。ちなみに、ここにおける「 ∞ 」は、変化後の結果状態が一義的に定義できず、原理的には変化し続けることを

示す。(I9)に、それぞれのタイプの意味の具体的説明と、それにあてはまる動詞（句）を挙げておく¹⁴。

(I9) a. $s_1 < f_1 < r_1$:

行為開始から状態開始まで一定の時間があり、状態変化がある¹⁵。

着る、着替える、壊す、作る、隠す、(洗濯物が) 乾く、(日が) 暮れる、
(ケーキを2個) 食べる、(ジョッキ1杯のビールを) 飲む

b. $s_2 = (f_2 < r_2)^n$:

開始時点と状態変化時点が同じで、その後もその変化が再起的に起こり、
変化自体に本来的に終了点があるか、対象が漸進的对象であるため、そ
れ以上変化が起こらない点が存在する。

(ミカンが) 腐る、治る¹⁶、(100ccの洗剤を) 使う、(氷が) 溶ける、(噂
が) 広がる

c. $s_3 = (f_3 < r_3)^\infty$:

開始時点と状態変化時点が同じで、その後もその変化が再起的に起こり
得るが、それ以上変化が起こらない点が定義されない。

(根性が) 腐る、冷える、疲れる、困る、濁る、澄む、太る、頼る、信じる、
(熱が) 上がる、(熱が) 下がる、(喉が) 乾く、煮え (切らない態度)、

(I9)を簡単にまとめると、「切る」の補部になることができるのは、変化は一

¹³ 実際は、VP 以外も補部として取り、多様な統語構造を取る可能性があるが、統語構造の考察は今後の課題としたい。

¹⁴ r より後（右側）の記述は本論で扱う現象に直接関係を持たないので省略してある。

¹⁵ 例えば、単に「ビールを飲む」は活動なので $s_1 < f_1 = r_1$ であるが、目的語が漸進的对象である「ジョッキ一杯のビール」等の場合、ジョッキのビールが消えるという変化があるので、その場合は $f < r$ であると考ええる。

¹⁶ 「治る」は瞬間的な1回の変化で起こることもある（「目薬をさしたら一瞬で疲れ目が治った」等）が、治るのに時間を要する場合もある（「徐々にアトピーが治った」「ガンはゆっくりとしか治らない」）。ここでは後者の「治る」を指す。

瞬でも変化前に一定時間のプロセスがあるか、もしくは、変化そのものが時間をかけて持続的に展開するという意味的特性を持つ VP であるということになる。

次に、特質構造内の形式役割 (FORMAL) の記述を見ると、「切る」は、補部 VP の表すイベントの中の一時点 p を取り出す関数であることが定義されている。 p とは、(20) の V1 の表すイベントの r_1 , r_2^n もしくは $r_3^{\infty \rightarrow n}$ の時点である。このうち、 r_1 および r_2^n は次のような時点である。

(20) a. r_1 : ある程度の時間の活動を経た結果としての結果状態時

b. r_2^n : ある程度の時間続く変化過程を経た、それ以上変化しない最終状態時

これらが、杉村 (2008) における「行為の完遂」や「変化の達成」に相当するものである。これらの意味は「切る」そのものの意味の違いから得られるのではなく、V1 の意味的性質の違いによって構成的に得られるものである。「切る」のはたつきは、「変化後の状態時点を指す」ということのみである。このように考えると、「切る」自体に多くの意味を指定しておく必要はなくなり、「V-切る」を多くの意味に分類する根拠も薄くなる。

次に、 $r_3^{\infty \rightarrow n}$ の時点の説明に移る。上記 2 つの時点に関しては、「切る」は V1 のイベントの中の一時点を取り出すということのみを行うのだが、この第 3 の場合は、さらに「 $\infty \rightarrow n$ 」という操作が加わっている。この操作は、本来、変化の結果としての最終状態が定義されない述語に対して、その状態を強制的に与えるという操作である。この「最終状態」はひとえに話者の主観によって認定される。つまり、上記 2 つの場合の取り出されるべき「変化後の状態」はもともと動詞句に備わっているわけであるが、この第 3 の場合は、それがもともと動詞句に指定されていないので、話者がそれを判断して「最終状態」を決定するということである。例えば「太郎は疲れ切っている」というのは、「疲れる」に客観的な「これ以上疲れようがない時点」があるのではなく「話

者から見て、そう思える場合、その時点話を話者の責任において最終状態として認定する」ということである。

この操作は、もともと「切る」が「最終状態を取り出すという機能」を持っているため、たとえ最終状態が存在しない場合でも、「話者の主観によって、強制的にその時点を指定する」操作であると言える。つまり、「切る」はある種のタイプ強制 (coercion) (Pustejovsky 1995) を引き起こす働きをしているということである。具体的に言えば、最終状態が定義されないイベントのタイプに最終状態を強制指定して、最終状態を持つイベントとして解釈するという操作である。こう考えれば、「車を壊し切った」等という場合になぜ「壊し終わった」のような「行為の完遂」の意味が得られ、「壊した結果、それ以上壊れようがない状態にまで達した」という「極限状態」の解釈が得られにくいのか、が補部の持つイベントタイプから自然に導出できる。つまり、「壊す」の場合は、初めから最終状態が指定されているので、タイプ強制の操作を適用する必要がないからであると言える。また、本論のメカニズムに基づけば、先行研究における「行為の完遂」や「変化の達成」と、この「極限状態」の関連性についても、形式的でより明示的な形で捉えられるものと考えられる。

最後に、構成役割 (CONST) について説明する。この場合の「切る」は語彙的複合動詞の「切る」と異なり、物理的あるいは比喩的な切断を表さず、アスペクト的な意味機能を持つと想定する（比喩的に「切断」の意味が感じられる場合、それは、上述のように、形式役割に登録されている「イベントにおける変化後の最終状態を取り出す」というアスペクト的な意味機能によって間接的に読み込まれるものであることになる）。したがって、具体的な意味内容を表す構成役割の値は空であり、V1 と複合した場合、その値が V1 の構成役割の値で満たされる。この、「構成役割の値が空であること」が、統語的複合動詞を形成する「切る」がいわゆる補助動詞であることを示していることになる。

具体例として、「疲れ切る」の意味合成（単一化）のプロセスを見てみよう。(21)は「疲れる」の意味表示である。項構造には疲れる主体 (y) が、特質構造の

形式役割 (FORMAL) には時間的特性 ((19c) 参照) が登録されている。構成役割 (CONST) には、「疲れた状態になる」という具体的意味内容が登録されている。

$$(21) \left[\begin{array}{l} tukare \\ ARGUMENT STRUCTURE \\ ARG 1: y \\ QUALIA STRUCTURE \\ \left[\begin{array}{l} Truth\text{-}conditional\ Section \\ FORMAL: s_3 = (f_3 < r_3)^\infty \\ CONST: BECOME (y, TIRED) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(21)と(18)の「切る」(再掲する)を単一化すると、(22)となる¹⁷。

$$(18) \left[\begin{array}{l} -kir \\ ARGUMENT STRUCTURE \\ \boxed{1} [VP: [FORMAL: s_1 < f_1 < r_1 \vee s_2 = (f_2 < r_2)^n \vee s_3 = (f_3 < r_3)^\infty]] \\ QUALIA STRUCTURE \\ \left[\begin{array}{l} Truth\text{-}conditional\ Section \\ FORMAL: kir (\boxed{1}) = p, \\ \text{where } p = r_1 \vee r_2^n \vee r_3^{\infty \rightarrow n}, p \in \boxed{1} \\ CONST: \phi \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$(22) \left[\begin{array}{l} tukare-kir \\ ARGUMENT STRUCTURE \\ [\quad] \\ QUALIA STRUCTURE \\ \left[\begin{array}{l} Truth\text{-}conditional\ Section \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: } \text{kir} (\text{I}) = p, \\ \text{where } p = r_3^{\infty \rightarrow n}, p \in \text{I} [s_3 = (f_3 < r_3)^{\infty}] \\ \text{CONST: BECOME } (y, \text{TIRED}) \end{array} \right]$$

(22)では、「切る」が項である「疲れる」と単一化している。つまり、すでに項は満たされているので、項構造の値は空白になっている。「疲れる」の時間特性は $s_3 = (f_3 < r_3)^{\infty}$ であり¹⁸、「切る」の選択制限の1つに当てはまるので、単一化が可能となる。空となっている「切る」の構成役割は、「疲れる」の構成役割で満たされる。形式役割を見てみると、「疲れ切る」とは「話者が、疲れる主体がそれ以上疲れようがないという限界点であると判断した時点」を指していることになる。

以上、本節では、統語的複合動詞「V-切る」について、V1 と「切る」の意味から構成的に「V-切る」の意味を導出できることを示した。

6「切る」の意味と文法化

「疲れ切る」等の (19c) のような一連の「V-切る」の場合、「切る」は、話者の主観を動詞句が表すイベントに反映させる機能を担うということなので、幾分モダリティ的な働きをしていると言える。つまり、助動詞により近いはたらしをしていることになる。これを「文法化」という観点から考えてみると、少なくとも現時点では「切る」の中で最も文法化の進んだ段階であると言えるだろう。

ところで、「V-切る」の歴史的な発達を論じた興味深い論考として青木 (2004) がある。青木の論で、本論に関係する部分をまとめると、概略次のよ

¹⁷ 実際は、「切る」の項は、例えば「太郎が疲れる」のような VP であるが、説明を単純化するために V との単一化として扱っている。

¹⁸ 「3」は便宜上のものである。

うになる。

- (23) 「～キル」は、中古の時点で「切る」対象を「物体→空間→時間」と抽象化させる形で発達し、中古から中世にかけて「切断」の意味が抽象化し、「行為に区切りをつける」という「終結」を表すようになる (ex. 「言いきる」「定めきる」)。そこから「きっぱりと」のような強調のニュアンスが生み出されるようになるのではないかと考えられる。そして中世後期になり、「言いきる」や「思い切る」等が語彙化される。その過程で、これらの語は「終結させるために行う動作そのもの」を強調することから、終結の結果が注目されるようになる。そしてその動作は「きっぱりと」行われたわけであるから、結果としてそれが「十分に」「満足いく形で」行われたという解釈を生み出すようになったのではないかと考えられる。現代語における「手足が冷えきる」といった「極度状態」、「小説を読みきる」といった「動作完遂」の用法は、いずれも文法化した「～キル」の本質的な意味である「十分な状態へ至る」というところから派生した用法である。

本論は共時的な視点で「切る」の意味派生 (文法化) を捉えようとしている。本論のモデルを用いれば、物理的・抽象的な切断を表し、語彙的複合動詞を形成する「切る」から、統語的複合動詞を形成する「切る」への派生 (文法化) は、特質構造における構成役割から形式役割への登録の変化であると捉えられる。

語彙的複合動詞を形成する「切る」が、構成役割において物理的・抽象の対象に対する「切断」の意味を持つのに対して、統語的複合動詞を形成する「切る」は構成役割の値が空になっているかわりに、項 (補部) となる動詞句に対して意味的選択制限を持ちつつ、「補部 VP の表すイベントの最終状態の一時点を取り出す」という意味的機能を持つ。これは、言い換えれば、「最終状態の一時点で区切りをつける」ことである。また、この「切る」は、本来、「最終状態」を備えている動詞句に対してのみ機能すると考えてみよう。もともと「最終状態」が存在するのであるから、区切りをつけず、そのままでも (つま

り「切る」をつけなくても）、基本的な意味（命題的な意味）はあまり変わらないが、敢えて「切る」をつけることによって、「区切りをつける」ということが「強調」されることになる（「きっぱりと」のようなニュアンスもここから生じる）。そこから「完遂」や「終結」のニュアンスが強く出てくると考えることができる。

さらにこの「切る」が、最終状態が備わっていない動詞句に対しても、ある一定時間以上の変化プロセスがあれば複合することができ、主観的に最終状態を決定する力を持つようになる。それが、現在における共時的文法化の最終段階である「極限状態」の意味につながっていくと分析することができる。

以上のように考えると、青木が想定しているような、文法化した「切る」の中核的意味として「十分な状態へ至る」ということを立てずとも、文法化のプロセスを記述・説明できる可能性が出てくる。もちろん、本論の考え方が歴史的な文法化の説明に対しても適用可能かどうかについては、さらなる分析と考察を要することは言うまでもないので、詳細は今後の課題である。

7 まとめと理論的展望および課題

本稿では、複合動詞「V-切る」の語形成過程を議論した。本論の利点としては次のようなことが挙げられる。

- V1の意味と「切る」の意味を分けて考えることにより、構成性の原理にしたがって透明性の高い形で語形成過程を記述・分析できる。
- 「切る」に多くの意味を想定せずに、「V-切る」の多義性を導出できる。
- 複合できる動詞（句）に対する選択制限を明示的に記述できる。
- 「疲れ切る」のような「極限状態」の意味を、「切る」の意味派生の観点から導出できる。
- 「切る」の（共時的）文法化プロセスに関する理論的モデルを提示できる。

また、動詞（句）の時間特性や視点に関する情報を明示できる特質構造を備えた意味表示を用いることにより、「V-切る」以外の、文法化に関わっていると考えられる複合動詞に関しても統一的な枠組みのもとで分析できるので、複合動詞における文法化全般の理論的分析が可能になることも大きな利点であると思われる¹⁹。

本稿では、「V-切る」に関して、V1と「切る」の意味合成に関して議論し、統語的複合動詞の「V-切る」については、イベントの時間的特性に着目すれば3タイプの補部を選択できることを述べたが、それらの補部が本当にすべてVPかどうかは今後さらに詳細に分析していく必要がある。由本(2005)は、影山(1993)を批判的に分析し、統語的複合動詞に関して、「非対格型」「VP補文型」「V⁰補文型」の3種類を提示しているが、意味的に多様な統語的複合動詞の「V-切る」は、これらすべての統語構造を取り、統語的にも多義な複合動詞である可能性があるが、具体的な分析は今後の課題としたい。

¹⁹ Bando and Hidaka(2015) および板東・日高(2016)では、「Vかける」について同様の枠組みで分析している。

参考文献

- Arai, F. & Hidaka, T. (2013). A Formal Analysis of Japanese V-*yuku* and its Grammaticalization..Paper presented at the 23rd Japanese/Korean Linguistics Conference, October 11-13, Massachusetts Institute of Technology, Boston, MA, the United States of America.
- Bando, M. & Hidaka, T. (2015). On Syntax and Construal of V-kake Constructions. *TALKS: Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin*, 18, 112.
- Hidaka, T. (2012). *Word formation of Japanese V-V compounds*. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.
- Igarashi, Y. & Gunji, T. (1998). The temporal system in Japanese. In Gunji, T. & Hashida, K. (Eds.), *Topics in constraint-based grammar of Japanese*, pp. 81-97. Kluwer.
- Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*. Massachusetts: MIT Press.
- 青木博史 (2004). 「複合動詞「～キル」の展開」. 『国語国文』, 73 (9), 35-49.
- 影山太郎 (1993). 『文法と語形成』. ひつじ書房.
- 郡司隆男 (2004). 「日本語のアスペクトと反実仮想」. *TALKS: Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin*, 7, 21-34.
- 志賀里美 (2014). 「複合動詞「～切る」における文法化の過程についての一試案」. 『学習院大学人文科学論集』, 23, 41-65.
- 杉村泰 (2008). 「複合動詞「-切る」の意味について」. 『言語文化研究叢書』, 7, 63-79.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992). 『基礎日本語文法』. くろしお出版.
- 板東美智子・日高俊夫 (2016). 「統語的アスペクト補助動詞が主観性を帯びるとき」. 『言語処理学会第22回年次大会 (NLP2016) 発表論文集』, 22, 389-392.
- 新沼文和 (2009). 「複合動詞「～切る」に関する統語論的分析」. 『高知学園短期大学紀要』, 40, 23-32.
- 日高俊夫・新井文人 (2012). 「「V テイク」の意味と派生について」. 『日本言語学会第145回大会予稿集』, pp. 352-357. 日本言語学会.
- 姫野昌子 (1999). 『複合動詞の構造と意味用法』. ひつじ書房.
- 森田良行 (1989). 『基礎日本語辞典』. 角川書店.
- 由本陽子 (2005). 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』. ひつじ書房.
- 李洙 (1997). 「中間的複合動詞「きる」の意味用法の記述：本動詞「切る」と前項動詞「切る」、後項動詞「-切る」と関連づけて」. 『世界の日本語教育』, 7, 219-232.